

コムラサキ

Apatura metis

タテハチョウ科



コムラサキ

撮影-吉原利之

名前の由来

翅が紫色に光るのでムラサキ。コはオオムラサキに対して小型の意味。漢字名：小紫

特定種

該当なし。

形態的特徴

翅が紫色に光る中型のタテハチョウ。

メスはオスに比べて翅表の地色が淡色で、橙色帯その他の斑紋は一般によく発達する。

オスの翅表は光線の方向によって紫色に輝くが、メスにはこれがない。

本州の一部ではクロコムラサキと呼ばれる黒色型があるが、これは地色が黒色、前後翅中央を走る帯状斑は白色となる。

オスの翅は光線の加減で紫に輝く



コムラサキ。表（左がオス、右がメス）



コムラサキ。ウラ（左がオス、右がメス）

チョウ標本：吉原利之氏作成・所蔵



コムラサキ

類似種と見分け方

特になし。

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
卵期					■							
幼虫期	■	■	■			■	■	■	■	■	■	■
蛹期			■	■								
成虫期				■	■	■						

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・森林)
鳥類
ワシ・タカ

生育環境・分布

好んでヤナギ類の樹液に集まり、また地上に静止することも多い。オスは開けた河原や路上の湿地に降りて吸水することも多く、動物の糞やヒトの汗にもよく飛来する。
分布: 国外分布は、東ヨーロッパからシベリア中央部を

経てロシア極東地域、中国大陸東北部、朝鮮半島。国内分布は、九州以北の日本全土。北海道内分布は、全域。十勝地方では、平野部から山間部まで普通に見られ、数も多い。

繁殖生態・寿命

年1回発生。成虫は7～8月に出現。越冬態は3齢幼虫。卵は食樹の小枝や葉の表に1卵ずつ産みつけられる。孵化した幼虫は葉の表に台座を造り、葉の先端の方から食い始める。落ち葉のころまで成長し2～4齢となり越冬する。越冬前には体色が緑色から灰褐色に変わり、枝の分岐部に台座をつくり、はりつくような形で静止する。越冬幼虫が静止する枝は指の太さ程度であるが、幼虫は体長6

mm程度と小さく、また樹皮の色とそっくりなため見つけづらい。越冬から覚めた幼虫は新芽の伸出後、体色を元に戻し摂食を続ける。終齢幼虫は葉の表に吐糸し、台座を造り、葉の基部を向いて静止している。蛹化は食樹の葉柄基部に吐糸し、ぶら下がった形で行われる。寿命: 不明。

他生物との関わり

- * 各種ヤナギ科植物を食樹とする。
- * 吸蜜植物としてノリウツギが確認されている。
- * 樹上を飛ぶ成虫が小鳥に捕食されたのを確認されている。

幼虫の食性（食樹）

オノエヤナギ、エゾノキヌヤナギなどの各種ヤナギ科植物。



オノエヤナギ。コムラサキ幼虫の食樹の一つ

興味深い話

■ 普通型のほかに地色が黒褐色のクロコムラサキ型があるが、この対立形質はメンデル遺伝をして普通型はクロコムラサキ型に対して、完全に優性である。クロコムラサキ型は関東以西で見られるが、静岡、愛知県の一部および、九州南部の一部を除いては極めて少ない。

■ 蛹は扁平で体色も葉の色にたいへん似ており、隠ぺい効果が著しい。幼虫（越冬幼虫を含めて）～蛹にかけての体色、体形は環境に対する見事な適応をみせている。
■ 十勝地方のアイヌ語では、チョウ類一般を「マレウレウ」という。

配慮事項

自生しているヤナギ林が必要。

参考文献

- 「原色蝶類検索図鑑」猪又敏男 北隆館 1990
「日本のチョウ」海野和男・青山潤三 小学館 1981
「原色昆虫大図鑑Ⅰ（蝶蛾編）」北隆館 1978
「蝶・蛾」白水隆 黒子浩 保育社 1996
「学研生物図鑑」昆虫Ⅰチョウ 監修 白水隆 学習研究社 1983
「十勝の蝶」大和与三追悼集 十勝蝶の会 1993
「川の生物図典」（財）リバーフロント整備センター 編 山海堂 1996
「北見の蝶」木村辰正 北見市教育委員会 1994
「北海道の蝶」永盛拓行・永森俊行・坪内純・辻規男 北海道新聞社 1986
「原色日本蝶類生態図鑑（Ⅲ）」福田晴夫・浜栄一 他 保育社 1983
「知里真志保著作集 別巻Ⅰ 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編」知里真志保、平凡社 1976

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・タカ) 鳥類
ワシ・タカ